

想創

いま私は最新作「嗚呼 満蒙開拓団」の岩波ホールでの上映が無事に終わり、予想していなかった多くの方が見てくださいる結果となって、ほっとしたところだが、改めて満州や満蒙開拓団について、関心を持っている人が非常に多いことを知って驚いたのであ

想創

この映画は中国の方正県にある日本人公墓のことを知りたいという「想い」と、開拓団で敗戦を体験した多くの人たちが語る「想い」によって支えられている。

日本人の遺骨を埋葬したいと県政府に願いだしたのは、残留婦人の松田ちよさんだっ

記録映画作家

羽田澄子



る。私も満州には縁がある。生まれたのは大連市。日本内地にも何年かいたが、小学校・女学校は旅順。戦後3年たって日本に引き揚げてきた。音信の途絶えていた戦後

映画「嗚呼 満蒙開拓団」への道

は、同じ満州でも最北端の開拓地で起きていた状況を知ることなく過ぎてしまっていた。戦後の開拓団の状況を知るようになったのは、中国残留孤児の訪

日調査が始まってからだ。2002年に中国残留孤児国家賠償請求訴訟がはじまって、私はこの問題の大きさを深さにショックを受けることになった。私はできる限り裁

聴している大勢の孤児たちに、裁判が終わってから中国語で裁判の内容の説明をしなければならぬ様子に、胸を突かれる思いがしたのである。そんなある日、届いた郵便物の中に「星火方正」という不思議な冊子があった。その冊子によると、中国・ハルビンに近い方正に敗戦後、多くの開拓団民が避難してきたが、零下30度を超す冬に耐え

られず、数千人の人が亡くなっている。戦後十数年たって、山間に散乱しているその人たちの遺骨を見た残留婦人の願いを受け、方正県人民政府によってつくられた「方正地区」日本人公墓があるというのである。日本が中国で行った暴行に対する中国人の深い恨みを思うと、これは驚くべきことだった。「これはどういうことか」と思ったのが、映画を作る原動力になったのだ。||月末を除き毎週火曜日に掲載します

記録映画作家

羽田澄子



た。現在は息子、孫、曾孫さんと東京で暮らしながら、残留婦人の帰国を助ける活動や体験を本にもしておられる。ぜひ当時のことを詳しくお話ししてほしいと思っていた

映画「嗚呼 満蒙開拓団」への道(2)

が、すでに高齢で脳梗塞も患われている彼女は、いろいろなことを「もうあまり覚えていない」「忘れたわ」と繰り返された。しかし、その台間台間

る遺骨を彼女が見つけたのだった。戦後十数年もたってから狼や犬に食べられ、散乱していた骨の話。彼女の願いが周恩来総理の判断で実現したことへの尊敬と感謝など。幾つもの貴重な言葉を聞

手紙や、自費出版の本がたくさん届くようになった。そのおかげで、長野県の飯田日中友好協会が「満蒙開拓平和記念館」を作る構想を持っていることを知った。これは素晴らしい、今までなかつ

た構想だと思った。長野は日本でも多くの開拓民を送り出した県。ぜひ実現してほしいプランである。人目に触れにくかった本や資料がこの資料室に集められ、満蒙開拓の資料がすべて見られるとなれば、素晴らしいことではないだろうか。私の映画もそうだが、戦争を知らない世代に過去の過ちを教え、国の方向を誤らせないことに役立てば、こんなうれしいことはない。||月末を除き毎週火曜日に掲載します